



Title	コロナ禍と学生生活の場
Author(s)	矢島, 裕章
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81414
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

I. オンライン授業： 綺羅星の登壇者たち

コロナ禍と学生生活の場

シナノケンシ株式会社

矢島裕章

本内容は、2020年7月7日にオンライン授業に登壇した筆者が、学生の期末レポートを読み、同年8月に学生向けのメッセージとして執筆したものである。

大阪大学の現役学生の皆さん、7月7日の授業にお邪魔させていただきましてありがとうございました。長野県上田市の、そして職場としての括りではシナノケンシ株式会社の矢島裕章です。林田先生から、皆さんの授業のレポートを共有いただきました。その一つひとつを読んでいると、私も思わず授業の振り返りをしたくなりまして、このように一筆書くことにいたしました。

レポートの中に、私や、ほかのゲストスピーカーを、「思い立ったらすぐ行動をするほうである」と、評していただき、かつ、そういう行動ができると「憧れ」ともとらえていただいている方が複数見受けられました。

そうか、なるほど。と思うわけです。実は、私は自身をそのように認識していません。むしろ、次々に行動を起こして新たな変化を起こし続けている友人知人を羨ましく思うことも正直あります。まだまだなああと思ってしまう日々です。

これは、どういうことなのでしょうか。結局、人間は生きていると、下記2つの認知（のゆがみ）から逃れることは、なかなか難しいのだと考えています。

①隣の花は赤い

②自分のことは、よくわからない

隣の花は赤く見えるもの。皆さんも経験が少なからずあると思うので、詳しい解説は不要だと思います。かの大女優、オードリー・ヘプバーンさえ、自身の容姿がコンプレックスであった、などという話もあるくらいですから。

私が参加した授業に、聴講されていた社会人が何人かいらっしゃいました。その方々が、授業の最後に感想でこのようなことを言わっていました。「授業で多くの経験をゲストから聞くことができる皆さんが羨ましい。大学生に戻りたいくらい」と。

受講した皆さんの中には、各界で活躍している社会人に対する憧れがあった人もいたことでしょう。お互いがお互いを羨ましく思ってしまう構図がそこにあったように思えます。私たちは、そのような認知からはなかなか逃れることができないのです。

一方、たとえ隣の花がすごく赤く見えても「自分は黄色に生きる！」とすることもひとつ の選択です。「花屋の店先に並んだ、『いろんな花』を見ていた」とあるように、様々な個性があふれることで、この素晴らしい社会が成り立っているわけですから。ですが、残念ながら、自分の姿は直接見ることができないのです。たとえ鏡を使ったり、動画で撮ったりしても、なんとなく実態がない感じがしてしまいます。先ほどの花の例なら「自分は今何色で咲いているか」がわからない、ということはよくあります。

思い立つたらすぐ行動する。そのようなタイプが、現在の社会では良いとされることが多い側面はあるでしょう。海外渡航や起業などのチャレンジが、かつてよりだいぶ敷居が低くなったことを考えると、考えてばかりより、とにかく行動することを求めているのも理解できます。

しかしながら、そのような人だけでは、社会は成り立たないです。多くの皆さんが、卒業後に何かしらの組織に属すると思います。その組織では、日々新しいことを生み出そうとします。

その中で、次々に新しい考えを生み出し実行できる、アイデアと行動力あふれる人を羨ましく思う人もいるかもしれません。一方で、そういう人たちが生み出したアイデアを、きちんと論理的に検証し、計画を立て、着実に準備をして進めていく。あるいは、場合によって

は「今回はやるべきではありません」とはっきり言える。そういう人材もまた必要で、このように様々な人がいるからこそ「組織」が成り立ちます。

組織だけではありません。わたしたちが普段生活している市民社会そのものも同じです。「すぐ行動するタイプ」ばかりでなく、「すぐ行動はしない（できない）タイプ」も、またそれらとは異なる別のタイプも、非常に重要な才能であり、組織や、この市民社会にとって必要な宝なのです。

皆さんは幸い、今は大阪大学という「場」にいます。（これは、物理的なキャンパスという狭義の「場」のみならず、大阪大学生である皆さんを取り巻く環境すべてが「場」です。オンライン授業もそのような場のひとつです。）この素晴らしい場は、成功も失敗もすべて学びにできる環境です。「自分はこういうタイプだからこれを極めたい」という人がいるのもOK。「自分のタイプをきちんと把握したいから、まずは幅広い視野と経験を身に着けたい」これもOK。「自分のタイプはわかってきたけど、実は別のタイプにもなつてみたい」もOK。すべてが学びとなる素晴らしい場にいるわけです。

しかし、このような声が聞こえてくるような気がします。「今は大学には行けないし、友達ともなかなか会えない…そのような中でどのようにこの「場」を活かして自分を知り、個性や専門性を深めていければよいのか」と。

「なにかを得る、ということは、何かを失うことである」

私が大学1回生の時、共通教育の授業の中で、ある先生がそう言っていたのを、今でもはっきり覚えています。授業を受けた当時「当たり前のように確かにそうだよな」と納得したものです。

財布に1万円入っていて、1万円のものを購入する（=得る）ということは、別のものを買うことができる機会を失っているわけです。また、行きたい会合が同じ日に別の場所で開かれていたら、片方選ぶ必要があります。

片方を選ぶということは、もう片方は、選ばれない（選べない）、ということです。単純

に言い切れないときもありますが、多くの場合に当てはまります。私は、ただそう思い、人生の選択に迫られるときにもこのような考えを頭の片隅におきつつ、以降の12年間生きてきました。

それが、私が31歳も近くなつて、最近さらに（ようやく？）気が付いたことがあります。逆もまた然りなのだ、と。つまり「何かを失うということは、何かを得ることである」ということです。

3月下旬ごろから、いわゆる「自粛」や「密を避ける」などということが盛んに言われるようになりました。私自身も、4月に友人の結婚式に出席するため、飛行機も予約していましたが、結婚式も日程不確定のまま延期になりました。また、（私がファンクラブ会員となって崇拝している）福山雅治の30周年記念日（！）のライブもなくなりました（高倍率のチケットは購入済みでしたが…）。それだけではありません。普段から、休みの日は家におらず、街に出て人に会うことが多い生活でしたから、生活様式が一気に変わってしまい、以降は会社の人や家族親戚としか直接会う機会はなくなりました。

这样的事態は人生で初めての経験です。週末の予定がないのは年に1度あるかどうか、というような生活を何年も続けてきましたから。これだけを見ると、（機会も含めて）「失った」ものは多くあるように見えるでしょう。実際にそういう側面は非常に多いと思います。

ただ、後ろ向きになってばかりでは仕方がない、と頭を切り替えることにしました。（コロナ禍当初はやや後ろ向きでしたが）、今だからできることをやろう、と思ったのです。今、どうあがいても人混みには行けないし、不特定多数が集まるイベントには行けません。人に会いづらい、かつマスクをしながら新たな友人をつくることも難しい状態です。だから、「今だからこそできること」に集中したのです。

- ステイホームで普段以上に長時間過ごす家は、できるだけ快適にしたかったので、自分

の部屋の不要物や、「なくても大して困らない」ものを思い切って整理し、部屋の中のものは4分の1くらいにしました。

- 高校卒業してから、身体を鍛える機会がほとんどなかったのですが、身体を鍛えるようになりました。（結果、体重は10kg減って、大学時代の体型に戻りました）
- 大学時代、文学部だった頃の専門である民俗学の文献を読んで自主的に勉学に励むようになりました。（本を読み漁っているときに、とある本の引用文献が林田先生の論文だったのをたまたま発見しました。それがきっかけで、久しぶりに林田先生に連絡をとったところ、今回のオンライン授業登壇につながったのです）
- 大学時代の友人と話す機会が以前より爆発的に増えました。話す場はオンラインになるので、海外含めて距離は関係なくなります。何年も会えていない友人と話せるのは今ならではです。

このコロナ禍の生活がはじまって、5か月ほどですが、今ほどプライベートで濃い生活も過去なかったと思います（仕事でも濃い日々が続いています）。

イベントに行く、友人に直接会うなどの多くの機会を失い、また、大量にあった部屋のものを物理的に処分し……つまり、これだけ多くの物事が仕方なく無くなったり、ものを意図的に無くしたりということは、私の人生で過去ありませんでした。

このプロセスの中で、本当に大切なものは何かを考える機会になっています。「必要と思っていただけで、実は必要ではなかったものは何か」、逆に、「本当に必要なもの、なくてはならないものは何なのか」と。これまでの人生でこの思考に到達することはほとんどありませんでした。この「ステイホーム」が、単なる感染予防だけでなく、自分にとって価値あるものに昇華しているのです。

今だからこそできることがあり、そこにフォーカスしたときに自身の価値観が見えてきました。このコロナ禍を乗り越えたときに、「あの機会があったから、価値観を見つめなおし、より良い選択ができた」と胸を張って言えるようになったら、さらに素敵だなあと思っています。

2008年4月、私の大阪大学入学式。そこで鷲田清一総長（当時）が話をした内容が、12年の時を経て、ようやくわかるようになってきました。（もちろん「わかるようになってきた」だけで、まだ完全にはわかっていないものです）

教養があるというのは、ものごとの軽量をわきまえているということです。生きていくうえでなくてはならないもの、絶対に失ってはいけないものと、あってもいいけどなくてもいいものと、端的になくともいいものと、そしてあってはならないもの、起こってはならないこと。これらの、言ってみれば価値の遠近法をわきまえているということです。そういう遠近法のなかに、自分のしたいこと、自分がいましなければならないことを、きちんとマッピングできるということなのです。

「賢い市民」というのは、そういうマップを携えて、「わたし」のみならずいまこの時代をともに生きる「わたしたち」が共通に直面していること、つまりはわたしたちの社会が抱え込んでいる問題、公共的な問題に的確に対処していく人のことです。不確かな状況のなかで不確かなまま的確な判断と決断ができる、そのための基盤となるのが、くり返し申せば「教養」というものなのです。

『帰路の前にいる君たちに 鷲田清一 式辞集』(2019)より

レポートに多くの皆さんのが記載の通り、大学に行けない、という状況でオンライン授業になったからこそ、様々なゲストの話を聞くことができたのだと思います。

現在、皆さんの生活は、本当に大変なことが多いでしょう。大学になかなか行くことができず、授業はオンライン中心となり、旅行含めて移動の制限が多い……一見「失った」モノや機会が多いかもしれません。しかし、それ以上に、皆さんは多くの「得た」ものが、確実にあるのだと思います。また、たとえ今、それに気が付いていなくても、数年経って「実はあの時得ていたのだ」と気がつくものもあるでしょう。

コロナ禍で大学生活を送り、これまでにない“多くの”経験をしている皆さん。そうした中で、自身の、同時に、社会の本質的な価値観に気がつく機会を得ている皆さんこそ、「わたしたちの社会が抱え込んでいる問題、公共的な問題に的確に対処していく」力を手に入れ

ることができますのだと思っています。

この前例のないコロナ禍ですが、「得るもの」「失うもの」含めて皆さんのですべての経験が、これからを生きる糧へとなっていきます。今はそれを信じ、とにかく、健康に気をつけて、良い夏休み、良い学生生活をお過ごしください。